

同志社大学大学院総合政策科学研究科 総合政策科学専攻図書館情報学コース

原 田 隆 史 ・ 佐 藤 翔

巻頭言でも触れたが、同志社大学は2015年4月より新たに大学院総合政策科学研究科総合政策科学専攻に図書館情報学コース（以下「図書館情報学コース」とする）を設置する。本稿では、この図書館情報学コースについて紹介する。

1. 同志社大学における図書館情報学教育

同志社大学の図書館司書課程は1952年に発足し、2012年には60周年を迎えた。60年間の歴史については、設立当初の状況、カリキュラムの変遷、図書館司書課程で行われた様々な活動、卒業生の状況など、多様な角度から同志社大学図書館学年報第38号「同志社大学図書館司書課程60周年記念特集号」でまとめている⁽¹⁾。

この記念特集号に記載しているように、同志社大学は図書館司書課程（以下「司書課程」とする）開設より60年以上の間に合計で4,000人以上の司書資格取得者、2,000人弱の司書教諭資格取得者を輩出しており、図書館への就職者も、大学に届け出があった正規職員に限っても大学・公共図書館がそれぞれ100名以上、学校図書館が約30名、専門図書館が約20名、国立国会図書館が6名に上る⁽²⁾。

長い伝統を有するだけでなく、司書課程の授業以外に様々な活動を展開していることも同志社大学の図書館情報学教育の特徴である。毎年春には「図書館ガイダンス」と題し、司書課程のOB/OGを招いて講演会を行うとともに、参加するOB/OGが所属する館種ごとに分かれ、それぞれへの就職を希望する学生と懇談する場を設けている。その他にも年1～2回、著名な図書館情報学関係者を招いた同志社大学司書課程主催の講演会を開催したり、司書課程受講者の中から希望者を募って普段見ることのない遠方の図書館を見学する「図書館ツアー」も例年開催するなど、授業だけではなく学生が現場やそこで働く図書館員、図書館情報学分野の最新知識と触れ合う機会を多く設けている。

さらに、同志社大学には授業外の時間にも司書課程の学生らが学ぶ場とそのための資料を用意した「司書課程資料室」が設置されており、長年図書館への就職を目指す学生

らの自主勉強会が開催されてきた。この勉強会は2013年から同志社大学図書館情報学研究会 (DUALIS) と名を改め、活動している⁽³⁾。DUALIS は採用試験の過去問等を使ったり、OB/OG などにインタビューして独自の練習問題を作成するなど、ユニークで有意義な勉強会を開催するのみならず、近隣の図書館・関連施設見学の自主開催、図書館総合展はじめとする各種イベントへの参加、Ustream を利用した Web ラジオ配信等、司書課程学生が自由に活動を行っている。学生がここで互いに刺激し合い、進路を考えたり学ぶ意欲を新たにしているようで、得がたい場となっている。

2. 図書館情報学コースの開設

このようにいち早く図書館情報学教育に関する取り組みを開始し、以降活発な活動を続けてきた同志社大学の図書館情報学教育関係者にとって、大学院レベルの、図書館情報学を中心とした教育体制の実現は長年の悲願であった。過去、渡辺信一教授および大城善盛教授が教鞭を取られていた時代の2002年～2004年にかけて同志社大学は図書館情報学をテーマとする4名の修士号取得者を輩出している。しかしこの時は大学院文学研究科教育学専攻、およびそれを改組した大学院社会学研究科教育文化学専攻の中の1つの研究室として大学院生を受け入れていたものであった。したがって授業としても図書館情報学に関連する科目は数科目開講されたのみであって、図書館情報学を中心に据えたカリキュラムが実現されていたわけではない。また、その後は図書館情報学に関する研究で修士号を取得した者は出現していない。

関西地方で同志社大学以外に大学院レベルで図書館情報学を学ぶ場としては、京都大学、大阪教育大学、大阪市立大学、立命館大学、桃山学院大学などがあり、特に大阪市立大学では長年に渡り図書館情報学に関する多くの授業も開講されてきた。しかし、これらの大学院もかつての同志社大学同様に図書館情報学以外の専門領域を学ぶ専攻に図書館情報学を専門とする教員が所属して教育を行うものであり、図書館情報学を教育の中心に据えた大学院カリキュラムが設定されていたとは言い難い状況にあった。そのため関西在住者が図書館情報学を教育の中心とした大学院で学ぶためには、関西を離れ、九州、中部あるいは関東にまで足を運ばねばならなかった。実際に同志社大学の司書課程を受講したり、DUALIS の活動に参加するうちに図書館情報学に興味を持った学生で、慶應義塾大学や筑波大学の大学院へ進学した者も少なくない。中でも、既に関西の図書館や大学等に職を得ている者にとっては遠隔地の大学院に働きながら通うことは困難で、関西に図書館情報学教育の拠点を求めるニーズは高かったといえよう。

長年、図書館情報学教育を行ってきた同志社大学に大学院レベルの図書館情報学教育の拠点を整備したいという意識は、同志社大学の図書館情報学教育関係者の間には長く受け継がれてきていたといえる。もちろん学部学生の間でも、他大学の大学院に進学す

る以外に同志社大学で図書館情報学を学び続けたいという要望もあり、そのニーズに応えたいという意識もあった。

3. 図書館情報学コースの概要

同志社大学における図書館情報学を中心とする大学院は、総合政策科学研究科の中に設置されるもので、図書館情報学コースの目的および教育方法の特徴、修了後に期待される進路は以下とされる。コースの詳細については図書館情報学コースの Web ページおよび、総合政策科学研究科の Web ページも参照されたい⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

なお、取得できる学位は「修士（政策科学）」となる。また図書館情報学コースの定員自体は設定されておらず、他の総合政策科学専攻とあわせて70名となっている。

[コースの目的]

情報社会に生起する社会的課題を解決するために、問題の把握、分析、評価を行うとともに、図書館政策・情報政策および各種組織等での事業を企画立案し、実施する理論的・実践的能力を涵養する教育研究を行っています。図書館や情報機関をはじめとした臨床の場で実践知を鍛え、それを理論的に練り上げることによって問題解決を主導することができる高度な情報研究のスペシャリストと、実務研究をとおして社会に貢献する研究者の養成を目指しています。

[教育方法の特徴]

図書館情報学の理論や研究手法および政策研究に関する基礎的科目と、図書館や情報機関などで生起する諸問題に関わる応用科目をバランスよく提供することで、総合的視点から企画の立案、分析、実施を担う情報専門家や研究者を育成するカリキュラムを提供しています。応用科目としては、図書館の各館種ごとの政策・経営に関する科目のほか、各種メディア、情報サービス、情報システムなど広い範囲の専門的な内容が用意されています。また、これら科目の一部は必要に応じて第一線の実務家と研究者教員が共同に担当することで現場での最新の事例なども取り込むよう工夫しています。さらに、研究演習科目や図書館情報学研究プロジェクトでは、各自のキャリアプランや関心に沿ったテーマを選択し情報専門職として必要となる調査研究能力を身につけることができます。

[修了後の進路]

修了後は、図書館や情報機関などの組織で高度な知識を生かして企画立案や実施を担当するスペシャリストとして活躍することが期待されます。また、図書館情報学の研究者として大学などに就職する途も開かれています。

4. 図書館情報学コースの特徴

4. 1 豊富な科目担当教員による、受講者の関心に応じた開講科目設定

図書館情報学コースのカリキュラムとしては、図書館情報学に関する科目を36科目(研究演習や図書館情報学研究プロジェクト、インターンシップ科目、フィールドリサーチプログラムなどを含む。2015年度に開講するのはうち21科目)を設置するほか、総合政策科学研究科総合政策科学専攻の他のコースの授業なども修了必要単位に含めることができる。コース内の開設科目については、関西のみならず全国から招いた多彩な非常勤講師陣が担当する予定である。図書館情報学コースで開講する科目一覧を第1図に示す⁽⁶⁾。

Curriculum ～カリキュラム～						
【博士課程(前期課程)】 図書館情報学コース						
第1年次		第2年次				
第1セメスター	第2セメスター	第3セメスター	第4セメスター			
導入科目 総合政策科学入門 図書館情報学研究入門	演習科目 研究演習Ⅰ		研究演習Ⅱ	研究演習Ⅲ		
研究基礎科目 政策研究基礎Ⅰ～Ⅴ						
必修・選択科目	基礎展開科目					
	図書館情報学特講Ⅰ(図書館論) 図書館情報学特講Ⅲ(図書館情報学研究) 図書館情報学特講Ⅴ(情報社会論)		図書館情報学特講Ⅱ(基礎情報論) 図書館情報学特講Ⅳ(情報メディア研究) 図書館情報学特講Ⅵ(図書館情報技術論)			
	応用展開科目					
図書館情報政策研究Ⅰ(情報政策) 図書館情報政策研究Ⅲ(大学図書館/学術情報基盤) 図書館情報政策研究Ⅴ(専門図書館/企業活動と図書館)		図書館情報政策研究Ⅱ(公共図書館/社会生活と図書館) 図書館情報政策研究Ⅳ(学校図書館/教育と図書館) 図書館情報政策研究Ⅵ(国会図書館/政府・国会と図書館)				
図書館情報メディア研究Ⅰ(電子出版と図書館) 図書館情報メディア研究Ⅲ(メタデータ管理)		図書館情報メディア研究Ⅱ(学術メディア論) 図書館情報メディア研究Ⅳ(ソーシャルネットワーク論)				
情報サービス研究Ⅰ(図書館サービス論) 情報サービス研究Ⅲ(児童サービス論)		情報サービス研究Ⅱ(情報サービス論) 情報サービス研究Ⅳ(図書館利用論)				
図書館情報学研究		図書館情報学研究プロジェクト				
コース共通						
選択・共通科目	共通科目					
	リサーチ・デザイン	数学	確率・統計学	心理学	物理学	総合政策科学実践論
	フィールド・リサーチ・プログラム					
		キャップストーンⅠ		キャップストーンⅡ		
修士論文または課題研究						

第1図 図書館情報学コースのカリキュラム

(注：開講科目などについては変更の可能性がある。最新の情報については、Web ページ⁽⁴⁾⁽⁵⁾を参照されたい。)

修士論文を指導する教員は2015年時点では1名だけであり、指導教員自身の専門分野は限られているが、大学院生の研究テーマについては、指導教員の専門にとらわれず、広く図書館情報学・情報学領域の中から選択して「研究演習」として指導を受けることが可能である。

開講される科目のうち、導入科目である「図書館情報学研究入門」および基礎展開科目である「図書館情報学特講」は館種を問わず共通する基礎科目として設置される。また、応用展開科目としては、公共図書館経営論、大学図書館、学校図書館等の館種に応じた「図書館情報政策研究」や、電子出版と図書館、メタデータ管理、児童サービス論等のトピックに応じた「図書館情報メディア研究」や「情報サービス研究」、さらにアーカイブズ論、政府情報等、いわゆる図書館の枠にとどまらない情報専門職の領域を扱う科目も「図書館情報学研究」として設定している。2015年度は開講しないものの、受講者の興味によっては専門図書館や国立図書館を扱う科目も開講できるよう準備を進めており、受講者は自身の興味・関心や領域に従って広範囲から受講科目を選ぶことが可能である。

また、大学院の修了単位には含まれないものの、大学院在籍者は司書課程・司書教諭課程の科目を受講することも可能である（司書課程等の登録料のみ追加が必要）。もちろん、例えば同志社大学以外の大学からの進学者で、学部において司書資格を取得していなかった学生が、日中は司書資格科目を受講しつつ、夜間は大学院科目を受講するということも可能である。

4. 2 現職者も受講しやすいカリキュラムと制度設計

図書館情報学コースでは、2015年度開講予定科目の多くが夜間または、土曜日・月曜日の集中授業として開講される。特に必修科目については、社会人が終業後の受講に可能なよう、多くを18：25～19：55にかけて開講される6時限と20：10～21：40にかけて開講される7時限に設定している。また、大学図書館等に興味のある学生の受講が集中しそうな科目は土曜日、公共図書館に興味のある学生向けの科目は月曜日に、月に1・2回の頻度で開講する集中授業として設定している。それぞれの館種で休日になっている場合が多い曜日に科目を設定することで、業務に支障のない受講が可能となることを目指している。

このように終業後・休日みの受講で単位がとれるような配慮を加えつつ、さらに現職者が無理のない範囲で修了を目指せるように、同志社大学の図書館情報学コースでは長期履修制度も利用可能である。これは標準修了年限である2年間での修了が困難なことが見込まれる現職者等の学生について、標準修了年限を超えた長期間での履修（最大6年）を認める制度である。長期履修の申請が認められた場合、授業料については標準

履修年限と同じ2年分のみ納めれば良い。教育充実費等、授業料以外の費用は一部必要であるため、完全に2年間で修了するのと同じ金額で修了できるわけではないが、一般的な大学院博士前期課程で3年以上在籍する場合に比べればかかる費用は割安となる。この長期履修制度は現職者のみならず恒常的に家事・育児や介護に従事している学生、疾病や障害を有する学生等も対象としており、無理のない範囲で教育を受けるように費用面で配慮している。

4. 3 図書館等の現場での活動を取り組む工夫

本誌の巻頭にも述べたように、図書館情報学コースは情報関連専門家の再教育と、図書館情報学の研究者養成の両方を目的としている。大きく変わりゆく現代の図書館等の現場で情報の専門家として活動するためには研究をし続ける必要があることを考えれば、この両者は不可分でもある。言い換えれば、図書館をはじめとする情報の専門家は常に研究者たる側面も持ち続けることが必要とも言えよう。また逆に図書館情報学という学問分野、特に図書館を主たる研究対象とする場合には、図書館をはじめとする現場の現状を常に意識し、現場での活動と常に密接に関わっていくことが必要ともされている。

図書館情報学コースでは、学部における司書課程・司書教諭課程とも連携して、研究と実務的な知識の習得の両方を目指していく所存である。そのために、開講される科目を担当していただける嘱託講師（非常勤講師）の先生方は大学で長年研究を続けられている方だけではなく、公共図書館や大学図書館、国会図書館などの現場で長年にわたって勤務されてきた方々にも大勢参加いただいている。また、授業内容としても大学での講義や演習だけにとどまらず、プロジェクト科目やインターンシップ科目、フィールド・プログラムなどの科目を設置して学外の方々との共同研究や交流を深めることができるように配慮している。これらは、社会人入学制度を利用して入学された方々（社会人院生）が自分の職場で研究活動を行うことができるだけでなく、大学卒業後に大学院に入学する院生諸君や、社会人院生が職場以外での活動を行うことも想定している。

幸いにも、関西地区には日本図書館研究会が研究者および図書館現場の方々の両方が積極的に関わる組織として活発に活動している。また、京都は「大学図書館問題研究会 京都支部」、「京都情報図書館学学習会」、京都大学の図書館員らのコミュニティである「ku-librarians」、図書館史に関する勉強会である「関西文脈の会」、毎年開催される関西地区の美術館／博物館(Museums)、文書館／資料館(Archives)、図書館(Libraries)、大学(Universities) および産業／企業(Industry) 関係者の交流会「近畿地区 MALUI 名刺交換会」等、組織や館種の枠を超えた、情報専門職のコミュニケーションが密な地域でもある。同志社大学では従来から前述の DUALIS が、これらの組織が開催するさまざまなイベントにも参加し、積極的に他大学の司書課程や図書館に興味を持

つ学生、さらには現職者とも交流するネットワークを築いている。図書館情報学コースでも、これら学外の組織と連携し、効果的な研究活動が行われることが期待される。

5. これからに向けて

2000年代後半に同志社大学における図書館情報学分野の大学院教育が事実上の休止状態になって以降、今回の図書館情報学コースは待望の復活となった。同志社大学において図書館情報学の大学院教育が根付き、大きな成果をあげることができるかどうかはこれからの活動にかかっているともしえよう。既に8名（うち社会人6名）の入学者も決定し、4月からの授業開始を待つばかりとなっている。これからの入学者も含めた院生諸君と教員とが協力して積極的に活動を続けていきたい。近い将来、同志社大学の図書館情報学コースが、日本図書館情報学会、日本図書館研究会、三田図書館情報学会をはじめとする学会の中核となる人々を、また図書館等の現場で積極的に新しい道を切り開いていくリーダーを生み出す存在へと育てていくよう努力を続けたい。

注・引用文献

- (1) 同志社大学司書課程. 同志社大学図書館学年報 第38号「同志社大学図書館司書課程60周年記念特集号」, 2013, 237p.
- (2) 実際には、大学に届け出をしていない人も少なからず存在しており、実数はさらに多いと思われる。
- (3) 工藤未越, DUALIS はじめました, 同志社大学図書館学年報, 2014, vol.39, p.78-79.
- (4) 同志社大学大学院 図書館情報学コース, <http://www.slis.doshisha.ac.jp/grad/> (参照 2015-03-06)
- (5) 同志社大学大学院 総合政策科学研究科, <http://sosei.doshisha.ac.jp/> (参照 2015-03-06)
- (6) カリキュラムに示す科目のうち、「図書館情報学研究」は以下の複数クラスを設置している。
 - ・政府情報論 ・学術情報論 ・図書館システム・オープンデータ ・情報リテラシー研究
 - ・デジタル・ヒューマニティーズ ・アーカイブ政策論研究 ・アーカイブズ学理論研究また、図書館情報学プロジェクトは春学期と秋学期の2科目を設定。なお、研究基礎科目は総合政策科学専攻の他コースと共通の科目である。

(はらだ たかし。社会学部教授、さとう しょう。社会学部助教)